成果報告

遼東地域の高句麗復興運動と剣牟岑

金　康勲
洪　性珉　訳

1．はじめに

『三国史記』・『日本書紀』・『唐書』などの様々な史書には，百済復興運動を起こした人物が数多く登場する。それに比べて，高句麗滅亡後に復興運動を展開した人物としては剣牟岑・安勝[1]・高延武が確認されるのみで，かつ彼らの活動は断片的にしか記録されていない。彼らの中でも，剣牟岑と安勝は，高句麗復興運動の軌跡において，主要人物として早くから注目されてきた[2]。彼らの活動は朝鮮半島・中国の史書に残っており，唐軍の対応措置が明らかに見て取れるからである。特に，中国側の史書には，剣牟岑が高句麗再建を図った人物として記録されており，唐が剣牟岑勢力を鎮圧するために二つの行軍を派遣したという点で，当時の事件の影響力が窺える。

現在，蓄積されてきた研究成果から，高句麗復興運動に対する大まかな理解は可能である。しかし，これまでは剣牟岑の挙兵及び活動地域を朝鮮半島北西部に限定して研究を行うのが一般的であり，特に南下以前，即ち挙兵初期の活動について考察した研究は管見の限り見当たらない。最近，剣牟岑が残民を糾合して南下を開始したとされる「窮牟城」を遼東地域の「蓋牟城」と推定した研究が発表され[3]，新しい視点から高句麗復興運動を考察する可能性が提示された。本稿はこれに基づいて，遼東地域における高句麗復興運動という視座から剣牟岑の活動を考察する。

2．中国側史書の剣牟岑関連記事の再検討

668 年 9 月，平壌城が陥落し，10 月に宝蔵王をはじめとする高句麗の支配層が唐に移された[4]。唐高宗の命により，李勣は彼らをまず唐太宗の陵墓である昭陵に献じた後，続いて長安に入って太廟に献じた。12 月，高宗は含元殿で彼らに対して賞罰を下す一方，高句麗故

地に対する唐の支配政策を決定した。5府176城69万戸に構成されていた高句麗領域を9都督府42州100県に改編し，これを統括する安東都護府を平壌城に設置したのである。続いて，高宗は南郊で高句麗を平定したことを告げる祭祀を，最後に太廟に拝謁して，高句麗戦役を終結させる儀礼を行った。

高句麗滅亡の後に，遺民たちが唐の支配政策に反抗して蜂起した時点と地域を明確に示す記録はない。ただし，平壌に安東都護府が設置され，薛仁貴が検校安東都護として兵士二万を率いて鎮撫したことにより，高句麗遺民の抵抗が誘発されたと思われる[5]。以後，高句麗遺民には逃散する者が多く出たが，これは唐の支配から逃れるために新羅・日本列島等に移住したというよりは，まだ唐に降伏していない城や地域へ移動したためと推測される。唐が本格的に高句麗故地の支配を試みたことで，遺民たちの反唐抗争が起こり始めたのである。

これは，669年正月に唐の僧侶，法安が新羅に来て磁石を求めたという記載からも分かる[6]。当時，僧侶たちが諜報活動にも携わっていたことを勘案すると，法安が派遣された目的は情報収集という面から理解することができる[7]。ただし，唐が要求した物品の「磁石」から，もう一つの派遣目的が考えられる。磁石は，金瘡によって内臓が出たり，出血が酷かったりした場合に，それに伴う発熱等の症状に対して使用された[8]。止血剤の一種である磁石を要求したのは，唐軍が戦闘で被害を受けて相当数の負傷者が発生したことを意味する。当時，唐は朝鮮半島以外の各地で戦争を行っており，多量の止血剤を必要としたためと推定する見解もある[9]。しかし，東突厥と西突厥はそれぞれ630年と659年に唐の攻撃を受けて崩壊し，羈縻支配を受けており，吐蕃と唐が本格的に対立し始めた時期も，670年4月に吐蕃が安西4鎮を陥落させてからであった[10]。故に，唐が磁石を必要とした戦場とはそれ以外であろう。法安は，その後浿江以南で剣牟岑に殺害された[11]。この記述は，法安が新羅に磁石を要求した後すぐに唐へ帰らず，平壌に行って滞在していたことを教えてくれる。法安は安東都護府と関わる，ある種の任務を帯びて派遣されたと推測され，故に彼が要求した磁石とは唐軍が高句麗故地で使う薬品と見なすべきであろう。該地の近辺で，止血剤である磁石を要求させるほど唐軍に打撃を与えることができた存在は高句麗復興勢力しか考えられない。669年1月頃から唐の支配に反抗する高句麗人の抵抗活動が展開され，唐軍と高句麗復興勢力軍の間で戦闘が発生していたのである。これは，唐が高句麗故地を安東都護府に再編する過程で作成した資料からも確認できる。

『三国史記』地理志では，鴨緑江以北の状況を記録し，諸城を未降城・已降城・逃城・打得城に分類している[12]。これには，総章2年（669）2月という時期が明確に記録されており，高句麗滅亡以後，遼東地域で数多くの城が安東都護府の支配から離脱していたことを示している。更に，未降城として記載された諸城は，地方支配の主要拠点であると同時に，軍

事的にも非常に重要な位置にあった。11 の未降城の中で，遼東地域にその位置が確認できる新城・遼東城・屋城・多伐嶽城は，最高位の地方官が駐在する所であり，遼東地域から平壌に至る主要交通路上に位置している[13]。そして，安市城は 645 年の唐軍の侵入を高句麗軍が決定的に撃退した所であり，高句麗滅亡以後，671 年に唐軍によって占領されるまで高句麗復興運動が発生していた地域であった[14]。鴨緑江以北の地域に，まだ降伏していない城が広い範囲で存在したことは，それほど遼東地域で唐の支配に対する抵抗が激しく起きていたことを示している。

このように，高句麗遺民の離叛者が多数発生すると，その対策として唐は 669 年 5 月に高句麗遺民に対する大規模徙民を実施する[15]。復興運動を起こす可能性がある勢力を唐の内地に徙民させてこれを未然に防止すると同時に，反唐抗争勢力の拠る社会経済的基盤を弱体化させるためであった。徙民の経路から，当時高句麗復興の動きがどの地域で活発に起きていたのかを把握することができる。海路は萊州を，陸路は営州を経由しているが，その中では営州に注目する必要がある。営州は，中原勢力が高句麗の遼東地域を脅かす拠点であると同時に，中原勢力と東北アジア諸種族の間の交易及び交通の要地であったため[16]，遼東地域に居住していた遺民は営州を経由して徙民された[17]。これは，高句麗滅亡の後，遼東地域での唐軍に対する抵抗が相当発生していた事実を教えてくれる。

大規模に高句麗遺民が唐の内地に徙民されたにも関わらず，唐の予想に反して反唐抗争勢力は萎縮せず，寧ろ拡散する傾向を見せた。このような状況で剣牟岑が挙兵したと考えられるが，挙兵時期と背景をより正確に把握するためには，中国側の史書に記録された剣牟岑関連記事を確認する必要がある。『資治通鑑』・『唐会要』・『新唐書』には，剣牟岑に関する次の記録が残っている。

A-①．庚午 …… 高麗酋長剣牟岑反，立高蔵外孫安舜為主。以左監門大将軍高侃為東州道行軍総管，発兵討之。安舜殺剣牟岑，奔新羅（『資治通鑑』巻 201，唐紀 17，高宗咸亨元年 4 月）。

A-②．高麗余衆有酋長剣牟岑者率衆叛，立高蔵外孫安舜為主。詔左衛大将軍高侃討平之（『唐会要』巻 73，安東都護府，咸亨元年 4 月）。

A-③．庚午 …… 高麗酋長鉗牟岑叛寇辺。左監門衛大将軍高侃為東州道行軍総管，右領軍衛大将軍李謹行為燕山道行軍総管，以伐之（『新唐書』巻 3，本紀 3，高宗咸亨元年 4 月）。

史料 A-①・②の記録を総合すると，次のようになる。670 年 4 月に剣牟岑が挙兵して安

勝を国王に立てると，唐は高侃と李謹行を行軍総管に任命して反乱鎮圧を試みた。そして，安勝が剣牟岑を殺して新羅に逃亡したことで，剣牟岑の挙兵は失敗に終わった。これらとは異なり，A–③は剣牟岑が挙兵して唐の辺境に侵入したと言及するのみで，安勝については全く語られない。そして，A–①・②・③は全て，剣牟岑が如何なる理由で挙兵をしたかについては沈黙している。事件の顚末をきちんと理解するためには，関連記録を再検討する必要がある。更に，A–①では剣牟岑の挙兵，安勝の即位，唐の行軍派遣，剣牟岑の殺害が全て 670 年 4 月条に記述されているが，これらの事件が全て同じ月に起きたとは考えられず，前後 1〜2 年の事件を一括して記したものと推定される[18]。そこで，まず 670 年 4 月条に記述された各々の事案が発生した時期を推定する必要があり，『三国史記』新羅本紀の剣牟岑関連記事を検討したい[19]。安勝の即位と剣牟岑の殺害時期が推定できるからである。

B–①．高句麗水臨城人牟岑大兄収合残民，自窮牟城至浿江南，殺唐官人及僧法安等，向新羅行。至西海史冶島，見高句麗大臣淵浄土之子安勝，迎致漢城中，奉以為君。遣小兄多式等哀告曰，… 今臣等得国貴族安勝，奉以為君。願佐藩屛永世尽忠（『三国史記』巻 6，新羅本紀 6，文武王 10 年 6 月）。

B–②．大王報書云 … 至咸亨元年六月，高麗謀叛，摠殺漢官（『三国史記』巻 7，新羅本紀 7，文武王 11 年 7 月）。

史料 B–①は，剣牟岑が小兄多式を新羅に派遣し，安勝の即位を知らせて新羅に援助を要請する外交文書を伝達したことを中心に，その背景と結果も合わせて叙述したものと思われるが[20]，内容に様々な事件が含まれており，時間的な差異があると考えられる[21]。まず，670 年 6 月に新羅へ送った外交文書で既に安勝を王としたという内容が含まれていることからみると，安勝即位の下限が 6 月であることが分かる。安勝即位の時点をより正確に把握するために留意すべき史料が B–②で，671 年に文武王が唐の総管薛仁貴に送った書信の中の一部である。これは，新羅が唐に叛逆したという薛仁貴の書信に反駁するために作成されたもので，新羅側の立場が強く反映されているが，事実関係においては史料的価値が高いといえる[22]。B–②では，新羅は熊津都督府との葛藤を説明する過程で，高句麗が咸亨元年（670）6 月に漢官を全て殺したと言及している。これは，B–①で剣牟岑が浿江の南に至って，唐の官人と僧侶法安を殺したということと同一の事件を指している[23]。剣牟岑が「唐の官吏を殺して安勝を王に立てた」とある以上，安勝の即位時期の上限は 670 年 6 月となる。結局，B–①で剣牟岑は唐の官人と僧侶法安の殺害・安勝の擁立・新羅に再び使者を派遣の順に活動を展開したが，その中で一番目と三番目が 670 年 6 月に起きており，従って安勝の即

位時期は 670 年 6 月と確定することができるのである。

次に，安勝が剣牟岑を殺して新羅に来奔した時点については様々な見解があるが，少なくとも剣牟岑が安勝を王に立てた後に安勝が剣牟岑を殺しているので，その殺害時期は安勝が即位した 670 年 6 月以後でなければならない。そして，唐の朝廷が行軍を派遣した時期を知るうえで注目すべきは次の史料である。

B-③．咸亨元年四月，其酋鉗牟岑反，立安舜為王。庚午，詔高**侃**為東州道，李謹行燕山道行軍摠管討之（『玉海』巻 191，兵捷，露布三）。

上記の史料は，宋代の代表的な類書として評価される『玉海』[24]で，唐が高句麗を滅亡させたことに関する資料を整理した「唐遼東道行台大摠管李勣俘高麗，献俘昭陵，檄高麗，含元殿数俘」条の夾註の中の一部である。安東都護府の設置を説明する本文に，唐の支配に対抗した高句麗遺民の活動に関する注釈を付し，咸亨元年 4 月庚午に下された措置が唐の行軍派遣であることを明示している。即ち，670 年 4 月の時点で剣牟岑が率いる高句麗復興勢力を鎮圧するために，唐の朝廷は行軍派遣を決定したのである。

以上のような理解が正しければ，A-①・②の咸亨元年（670）4 月条で，670 年 6 月に行われた安勝の即位とその後に発生した剣牟岑の殺害が共に記述されたのは杜撰であり，剣牟岑と関連する諸事件が時間の流れと整合性を持たずに混在していることが分かる。そうすると，唐が行軍を派遣して剣牟岑勢力に対する鎮圧に出た理由についても異なる解釈をすべきである。今までは，剣牟岑が安勝を王に立てて高句麗を再興したため，これに対応して行軍を派遣したとする考え方が一般的であった。しかし，このような理解は間違いであり，唐軍が派遣された後に安勝が国王に即位したのである。したがって，唐が行軍を派遣した理由は『新唐書』本紀（A-③）に記録されているように「剣牟岑が辺境に侵入」したためと理解すべきである。中国側の史書に記録された剣牟岑関連事件は次の順序に再構成することができる。

表 1　剣牟岑関連事件の概要

剣牟岑挙兵	→	辺境侵入	→	唐の行軍派遣（670 年 4 月）	→	安勝の即位（670 年 6 月）	→	剣牟岑の殺害（670 年 6 月以後）

３．剣牟岑の挙兵背景と基盤

第２章で見たとおり，剣牟岑と関連する事件を再検討すれば，最初に挙兵した時期を推定することは可能だろうか。唐が行軍派遣を決定した時期が 670 年 4 月であれば，剣牟岑勢力が唐の辺境に侵入した時期は，これより早いとすべきである。まず，高句麗故地から唐の首都長安までの距離と当時の文書伝達速度を考慮すべきである。唐代の文書伝達速度は，最速で１日に 500 里であったが，実際には１日に百数十里程度であった[25]。遼西地域の営州から平州・幽州・定州・衛州・東都等を経て長安に至る路線が 3,745 里であったため，平均的な文書伝達の速度で計算すると，25 日程かかったと推測される[26]。加えて，唐の朝廷で対応策を議論する時間も考慮すべき要素である。これらを合わせて考えれば，剣牟岑勢力が唐の辺境に侵入した時期は 670 年の年初に比定することができる。

また，剣牟岑が挙兵した時期と唐の辺境に侵入した時期の間の時間差も存在する。剣牟岑が挙兵した当初は，勢力規模が小さく，唐に脅威を与える程ではなかったため，安東都護府管下の兵力を活用した鎮圧を行ったであろう。その後，剣牟岑勢力が辺境に侵入する事態に至ると，唐も積極的な対応策に戦略を修正したと思われる。剣牟岑が挙兵して辺境に侵入するまで，ある程度の時間が必要であったと推測せねばならない。これらを考慮すると，次の記録が注目される。

> C．総章二年，徙高麗民三万於江淮山南。大長鉗牟岑率衆反，立蔵外孫安舜為王。詔高偘東州道，李謹行燕山道，並為行軍総管討之，遣司平太常伯楊昉綏納亡余。舜殺鉗牟岑走新羅。偘徙都護府治遼東州，破叛兵於安市。又敗之泉山，俘新羅援兵二千。李謹行破之于発盧河，再戦俘馘万計。於是平壌痍残不能軍，相率奔新羅，凡四年乃平（『新唐書』巻 220，列伝 145，東夷，高麗）。

この史料には，安東都護府の設置以降，高句麗復興運動の発生と唐の鎮圧過程が記述されている。ここでは，唐が 4 年ぶりに高句麗復興運動を平定したと表現していることに注目する必要がある。李謹行が発盧河で勝利して，高句麗復興勢力が新羅に逃亡し，復興運動が消滅した時期は 673 年閏 5 月であった[27]。よって，唐が認識していた高句麗復興運動の始まりはこれより 4 年前，即ち 669 年 5 月に実施された徙民によるものとなる。この 4 年ぶりに「平定」したという表現は，高句麗復興運動の全般を指しているが，平壌の敗残兵（「平壌痍残」）という表現と併せると，平定の最終目的は剣牟岑と安勝勢力の鎮圧であったといえる[28]。つまり，史料 C は剣牟岑の挙兵と南下以後の行跡，そして剣牟岑の死後の残存勢力

の動きを記述したものであると思われる。剣牟岑の挙兵の前に記述されている669年の徙民記事は，剣牟岑が挙兵することになった背景を叙述した部分であろう。大規模徙民は，高句麗遺民社会に大きな波紋を投げかけたはずで，その準備及び実行の過程で相当の抵抗が誘発されたと思われる。さらに，徙民の対象がもともと政治・経済的に上層にいた人々であったため，抵抗は更に激しいものになったと思われる。このような流れの中，高句麗故地の各地域で徙民に抵抗して諸勢力が挙兵したのであり，その一つが剣牟岑勢力であったと考えられる。

次に，剣牟岑が挙兵できた社会的・軍事的基盤について考察する。剣牟岑は地方出身の中級貴族と考えられている[29]。これは，彼が水臨城出身で新羅に南下する当時に帯びていた官等が大兄であったためである（B-①）。まず，水臨城は，B-①の他には剣牟岑の出身地域を語る記録が見つからないため，具体的な位置を比定しがたい。語意上の類似を根拠に水臨城を津臨城（現，坡州市郡内面）に比定する見解がある[30]が，これは剣牟岑が復興運動を行った地域を大同江一帯と看做す立場に基づいて，朝鮮半島の北西部一帯に水臨城を設定しようとしたもので従いがたい。後述するが，剣牟岑の挙兵地域は遼東一帯である可能性が大きく，水臨城もまた遼東地域内であると考えられる。現時点では，水臨城に比定しうる所を探しがたく，今後の課題としたい。ここでは剣牟岑が王都である平壌ではなく地方出身であった事実を指摘するのみに留めておく。

また，剣牟岑が所持した大兄という官等から，高句麗社会で彼の政治・社会的地位が推測できる。7世紀の高句麗の官等組織は，12等に構成されており，その中で大兄は7位に当たる[31]。大兄官等の所持者が就任できる官職として末若があった。

> D. 高麗記曰 …… 其武官曰大模達，比衛将軍，一名莫何邏繡支，一名大幢主，以皂衣頭大兄以上為之。次末若，比中郎将，一名郡頭，以大兄以上為之，其領千人。以下各有等級（『翰苑』蕃夷部高麗所引「高麗記」）。

『翰苑』に引用された「高麗記」は，641年内情偵察を目的に唐から高句麗に派遣された陳大徳が帰国した後に作成した報告書であり，7世紀半ばの高句麗の政治機構・地理情報等を詳細に収めているとされる[32]。ここには，大模達（莫何邏繡支，大幢主）-末若（郡頭）-それ以下の等級という7世紀の高句麗中央軍の編制が描かれ，各武官が就任できる官等の規定が述べられているので，早くから注目されてきた。

特に，大兄以上の官等所持者が任命される末若の異称が郡頭である点が注目される。郡頭は，地方統治単位である郡と密接に関連する名称であり，郡に派遣された地方官名と推定さ

れたり，または末若が武官であることから，郡単位の地域に駐屯している地方軍の指揮官ともされている[33]。高句麗では，軍事制度と地方制度が密接に関わっており，特に地方官は民政権と共に軍政権も持っていて，該当地域の地方軍を指揮していたため[34]，武官職である末若が地方官名である郡頭とも呼ばれているのである。中央軍の武官として千名単位に構成された部隊を指揮する官職が末若であれば，これに相当する地方軍を指揮する者が郡頭と呼ばれた可能性が高い。剣牟岑は大兄官等を持って一定の地域を治める地方官であると同時にその地域の軍隊を統率する軍事指揮官として活動したといえよう。

これは，次の事例からも傍証し得る。高句麗で大兄官等を所持していた人物たちは，軍事的に重要な地域を担当した地方官であった場合が多い[35]。代表的な人物には，烽上王代に新城宰として新城一帯を管轄し，慕容**廆**の侵入を撃退した功で小兄から大兄に昇進した高奴子[36]と，５世紀の初めに令北夫余守事を歴任した牟頭婁の祖先で，北夫余地域を統治したとされる大兄冉牟，□道の城民と谷民を統治した□□大兄と慈□大兄[37]，「忠州高句麗碑」に見られる古牟婁城守事の大兄耶□[38]がいた。そして，剣牟岑と似たものとして，高句麗後期に地方出身として大兄官等を所持していた人物である柵州都督兼総兵馬を歴任した李他仁の祖父福鄒がいる[39]。福鄒がどんな官職を歴任したかは不明である。しかしながら，李他仁の家門は，柵城一帯を基盤としながら数世代に掛けて活動した高句麗の地方勢力と推定され[40]，李他仁が柵州都督兼総兵馬として高句麗の 12 州と靺鞨 37 部落を掌ったという点で，彼の先祖たちも柵城一帯の地方官或いは武官として活躍した可能性が高い。このような事例を参考にすると，彼らと同一に大兄官等を帯びていた剣牟岑も地方官として地方軍の軍事指揮権を行使したと考えるべきである。

高句麗滅亡の当時，剣牟岑が実際に地方官として駐在した処は，彼が南下を開始した窮牟城であっただろう。高句麗後期の地方官には，褥薩・処閭近支・可邏達・婁肖があった。その中で褥薩は最高位の地方官としておおよそ位頭大兄以上の官等を所持しなければ任命されず，その下の地方官である処閭近支は，大兄以上の官等所持者が任命された[41]。剣牟岑は窮牟城の処閭近支であった可能性が高い。剣牟岑が水臨城の出身である点，大兄官等を所持していた点，これらと共に高句麗の大兄官等所持者たちの活動を参考にすれば，剣牟岑は数世代に渡って遼東地方の特定地域を治める地方官或いは武官として活動した中級の地方貴族の家門の出身であり，本人は窮牟城の処閭近支として窮牟城の民政と軍政を担当していたと推測される。

剣牟岑は「群衆を率いて叛乱を起こした［率衆叛］」とされる（A-②）。『三国史記』では「群」を「残民」と表現しているが（B-①），ここで剣牟岑が率いる「衆」または「残民」が復興運動を起こした軍事的基盤であった[42]。これは，新羅と唐が百済復興運動を起こし

た百済遺民勢力を指した表現からも傍証される。福信と道琛が周留城を根拠に復興運動を起こした時，「群衆［衆］」を率いたが，これは福信が率いる「兵士［兵］」を指している[43]。そして，新羅は神文王７年（687）に青衿誓幢を創設したが，これは百済残民で構成されている[44]。このような用例からみると，剣牟岑が率いる「群衆」と「残民」は一般の百姓とは考えがたいので，高句麗復興軍として把握すべきである。

復興軍の主軸には，高句麗滅亡以前から窮牟城に駐屯していた地方軍を基盤としたであろう。高句麗地方軍の編制は，当時の地方統治組織と一体化しており，運用面では地方官が指揮官となり，兵卒集団の主力は土着の住民により構成された城兵であった[45]。高句麗滅亡以前に，剣牟岑は窮牟城の地方官として地方軍を率い，剣牟岑と窮牟城の住民とは軍事指揮系統を媒介に結合した経験があった。これが剣牟岑が高句麗復興軍を組織・運用することのできた基盤として作用したといえよう。

4．唐軍の対応と遼東・遼西地域の高句麗遺民の動向

剣牟岑の挙兵事実を記録した中国側の史料（A-①・②・③）には，剣牟岑が挙兵した地域ははっきりと表れない。一方，『三国史記』新羅本紀では，剣牟岑が窮牟城から浿江の南に至って唐の官人を殺したとする（B-①）。窮牟城の位置は具体的には分からないものの，浿江即ち大同江の南に至って唐の官人を殺害したという点から，先行研究では剣牟岑は平壌の近隣地域で挙兵したものと認識され，窮牟城は朝鮮半島の中に求められてきた。ところで，最近剣牟岑の「辺境侵入」と，唐の行軍名が一般的に遠征の目的地を表すこと[46]に着目して，剣牟岑の挙兵地は遼東地域である可能性が提起された[47]。史料A-③には，剣牟岑が叛乱を起こして辺境に侵入し，唐が高侃と李謹行を東州道行軍総管と燕山道行軍総管に任命してこれに対応する様がうかがえるが，ここで述べられている東州道とは遼東地域を，燕山道とは遼西地域を指すと指摘されている。東州とは，遼東州の略語とされるので[48]，高侃は遼東地域に派遣されたといえる。そして，『括地志』[49]によると，燕山は幽州漁陽県の東南60里に位置するとされ[50]，『高麗図経』には燕山道から陸路を進み，遼河を渡って東方に3,790里行くと高麗の国境に至るとある[51]。したがって，燕山道は現在の北京以東から遼河以西に至る道であると推定される[52]。即ち，行軍名から見ると，高侃は遼東地域に，李謹行は遼西地域に派遣されたのである。これは，次の史料がその傍証となる。

E-①．大長鉗牟岑率衆反，立蔵外孫安舜為王。詔高侃東州道，李謹行燕山道，並為行軍総管討之，遣司平太常伯楊昉綏納亡余。舜殺鉗牟岑走新羅。侃徙都護府治遼東州

（『新唐書』巻 220，列伝 145，東夷，高麗）。

E–②．楊防為司平太常伯，往安東，安撫高麗余衆。時有高麗酋長鉏牟岑率衆反叛，立高蔵外孫安舜為主。詔左監門大将軍高侃為東州道行軍総管，発兵以討之。安舜遽殺鉏牟岑，走投新羅。防侃始拔安東都護府，自平壌城移於遼東州（『冊府元亀』巻 429，将帥部 90，拓土，楊防）。

E–①で，高侃・李謹行と共に楊昉が高句麗故地に派遣されたことが確認される。注目すべき点は，E–②で楊昉が安東に行って高句麗遺民を安撫したことである。これは，楊昉が派遣された所が平壌城に設置された安東都護府であることを意味する。高侃と李謹行が兵士を動員して高句麗復興勢力を討伐したことに比べて，楊昉は「逃亡して残った群衆を呼び戻した」という表現から分かるように，平壌地域で高句麗遺民の動揺を防ぎ，反唐抗争が拡散されることを阻止する活動を展開していた。それは，楊昉が派遣された平壌では高句麗遺民の軍事活動が活発ではなかったことを意味し，剣牟岑の活動舞台が平壌地域ではないことを示唆する。

楊昉が担当した役割は，これだけにとどまらなかった。E–②では，高侃と楊昉が安東都護府を平壌城から遼東州に移したとしている。670 年 6 月に剣牟岑が平壌一帯を占領すると（B–①・②），平壌城は安東都護府の治所として機能できなくなった。その際，楊昉は安東都護府管下の官吏を撤収させる等，平壌城から遼東地域に安東都護府を移すための作業を実施し，官吏と共に唐に戻ったと推定される。その後は東州道行軍総管の高侃が安東都護として遼東城に駐在しながら，剣牟岑勢力を鎮圧するための軍事活動を行ったのである。

剣牟岑の挙兵に対する唐の対応措置をもっと正確に把握するために，李謹行の息子李秀の神道碑を見たい。

E–③．公諱秀，字玄秀，范陽人也。… 考諱謹行府君，左金吾衛大将軍。… 公幼而英明，壮而特達。… 及二九渡遼，什伍禦寇。耳以金皷，目以旌旗，紛紛紜紜，雑雑沓沓。公乃独出独入，一縦一横，□飛鏃応弦以陥堅，迴戈随手以包敵。… 以開元四載四月一日，春秋六十有二，薨于范陽郡之私第（「李府君神道碑」）[53]。

神道碑によると，李秀は 18 歳の時，遼水を渡り戦闘で先鋒として活躍し敵を撃破した功を立てたので，遊撃将軍の位を授けられた。彼は開元 4 年（716）に 62 歳で死亡したので，18 歳で遼水を渡ったのは 672 年であることが分かる。李謹行が 673 年閏 5 月に瓠蘆河の西で高句麗遺民を撃破する前，その妻劉氏は伐奴城に残り，高句麗と靺鞨の攻撃を防いでい

た[54]。李謹行が妻と一緒に従軍した点からみて，彼の息子も一緒に出征したと見るのが合理的である。従って，燕山道行軍総管の李謹行は 670 年 4 月に，妻や息子等の家族を率いて遼西地域に出征し，672 年に遼水を渡って遼東地域に進入したと見るべきである。李謹行が率いる唐軍を遼東地域に渡らせず，約 2 年にわたって食い止めた存在があったことは，次の墓誌銘からも確認される。

E-④．君諱行節，□□該，太原人也。… 属青丘背命，玄菟挺災。軍将等以公早習戎昭，夙静韜略，遂表公為鶏林道判官兼知子営総管，又奏公為押運使。於是揚舲巨海，鼓棹遼川，風起濤驚，船壊而溺。形沉水府，神往脩文。其化迹之時，即唐咸亨二年之歳也（「大周故郭府君墓志銘」）[55]。

上記の墓誌銘は，郭行節の息子思元が母劉氏の葬儀をする際，溺死した父郭行節の魂魄を呼び戻して一緒に墓を作るという目的で作成したものである[56]。墓誌銘によると，郭行節は鶏林道判官兼知子営総管及び押運使に任命されたが，咸亨 2 年（671）に風浪に遭い船が壊れて水に沈み死んだ。彼の官職を分析してみると，新羅征討軍を率いる鶏林道行軍総管薛仁貴の麾下で倉庫・武器・騎馬・防具等を管理し，輸送業務を担当する部隊を指揮していた[57]。この資料で注目すべきことは，郭行節が溺死した場所が遼川という点である。遼川とは遼河を指すので[58]，郭行節は軍需物資を乗せた船を率いて遼東地域に行こうとしていたことが分かる。遭難の危険を冒してまで海路を通じ補給を試みた様子は，遼東地域で活動する唐軍には陸路の補給が困難だった状況を表すと同時に，遼西地域での唐の行政力が不完全であった状況を示唆する。唐軍の補給を阻止した勢力は，李謹行を約 2 年間遼西地域に縛り付けていた存在と同一だっただろう。ここから，李謹行が遼西地域に派遣された理由を推測できる。

前に触れたように，669 年 5 月に唐は高句麗遺民を対象とした大規模徙民を断行し，遼東方面に居住していた遺民は営州を経由して徙民された。この過程で営州に定着した遺民がいたと考えられるが，後日渤海を建国した大祚栄らが代表例であろう[59]。また，営州城傍の高麗人王思礼の事例から，営州城の近隣には集団で居住して営州都督府の指揮を受けながら暮らしていた高句麗人によって構成された軍事集団が存在したことが知られている[60]。

営州と共に幽州に存在していた高句麗遺民にも注目する必要がある。唐は，645 年に高句麗を攻撃して占領した遼東城・蓋牟城・白巌城を各々遼州・蓋州・巌州に改称し，軍を引くのに際して三州の戸口 7 万人を中国に移した。さらに唐の諸軍が捕虜とした 1 万 4 千名の高句麗人を唐の内地に徙民して幽州に集結させたが，高句麗征伐に失敗した唐太宗は退却して

幽州に戻り，唐の軍人に高句麗人を賞賜する代わりに唐の諸軍にその身代金を銭と布で支払って彼らを百姓とした[61]。その際，１万４千名に達する高句麗人のほとんどが幽州に定着したと考えられ，彼らが前述の幽州の城傍として組織された可能性がある[62]。

これら両事例は，唐の内地に徙民される過程で，一部の高句麗遺民たちは本来の社会・軍事的組織を維持しつつ営州と幽州一帯に定着したことを示している。言葉を換えれば，営州と幽州一帯に徙民された高句麗遺民たちは，唐の支配に抵抗して軍事活動を展開し得る力量を持っていたのであり，彼らが遼西一帯で反唐抗争を行ったのではないか。李謹行が燕山道行軍総管に任命されて遼西地域に派遣されたのは，これを鎮圧するためと推測される。

それでは，670 年当時の剣牟岑の挙兵と遼西地域の高句麗遺民の動向の間には，如何なる関連性があったのか。これについては，以下の３つの可能性が想定される。第一に，各々独自の勢力が起こした個別的事件の場合である。営州一帯が辺境地域とはいえ，唐の支配領域であったため，両勢力の間では事前に意志を通じ合わせることなど有り得ない。第二に，遼東一帯で剣牟岑を中心とした復興運動が先に発生し，これが遼西一帯に広がった可能性である。遼西地域の高句麗遺民たちは反唐抗争を始めてから高句麗故地へ帰るために東走したことが明らかであり，唐の立場からは両勢力を一つの集団として認識した可能性がある。第三に，両勢力が事前に計画して同時に復興運動を起こした可能性である。当時の状況を正確に把握するには関連史料が足りないものの，これについては唐の朝廷の対応からある程度の手掛かりを探せると思われる。

まず，剣牟岑の叛乱を鎮圧するための責任者として，高侃と共に李謹行が一緒に行軍総管に任命された点である。剣牟岑勢力の鎮圧という目的を帯びていた李謹行が遼西地域に出征したということは，剣牟岑勢力と遼西地域の高句麗遺民が緊密な関係を結んでいたことを意味するのではないか。もし，両勢力が個別の活動であると唐が認識していたならば，李謹行を燕山道行軍総管に任命しながら，別途に行軍を派遣した理由を説明するはずだが，現在そのような史料は見つからない。即ち，唐の朝廷は遼東地域の剣牟岑勢力と遼西地域の高句麗遺民勢力を一つの集団として認識していたのである。

更に，唐は「剣牟岑が反乱を起こして辺境に侵入した」（A-③）と認識していた。遼東地域で挙兵した剣牟岑が唐の辺境に侵入したとすれば，その地域は遼西一帯を想定しなくては理解しがたい。ところが，剣牟岑と関連する諸々の史料には，挙兵した後に南下しながら行った活動のみが見えるだけで，唐の領域を侵犯した様子は見つからない。「辺境に侵入した」という句の意味を，剣牟岑が安東都護府の治所である平壌城を占領し，高句麗を興そうとした行為と見ることもあるが[63]，これは剣牟岑の挙兵地域を平壌の近隣と見る立場に由来したものである。

ここで，遼西地域で発生した高句麗遺民の反唐抗争に注目する必要がある。もし，遼東地域の剣牟岑勢力と遼西地域の高句麗遺民が協力的な関係に基づいて，事前に反唐抗争を準備したとすれば，「辺境に侵入した」という句を合理的に理解することができるだろう。高句麗滅亡以後に遼西地域に居住していた高句麗遺民と遼東地域に残存していた高句麗遺民の間で，相互関係網が存在し，これを通じて事前の計画の下，一緒に反唐抗争を起こしたのではないだろうか。遼西・遼東一帯で大規模な復興運動が発生し，これに関するある種の情報を入手した唐の朝廷は，両勢力を同一の実体として把握し，これを剣牟岑勢力が「辺境に侵入した」という認識にまで発展させたと考えることは比較的妥当であろう。

このような推論が成立するためには，両勢力がどのような経路を通じて反唐抗争を事前に準備したのか，検討が必要である。これと関連して，6 世紀末～7 世紀の高句麗の西の境界を遼西一帯と見る最近の見解に注目したい[64]。それによると，6 世紀末～7 世紀の高句麗は遼西一帯に城・鎮・羅等の軍事施設及び拠点を多数設置して，隋・唐と軍事的に対立し，契丹・靺鞨に対する統制力を行使していたとする。更に，高句麗が運営した遼西一帯の諸軍事拠点は，遼東城と共に防御体制を構築し，有機的に繋がっていたという。

612 年，隋は大規模に兵士を動員して高句麗に侵攻し，武厲邏を奪ってそこに遼東郡と通定鎮を設置した[65]。また，645 年に唐の李世勣は通定鎮から遼水を渡り玄菟を攻撃した。隋と唐は，遼西一帯に高句麗が設置・運営した軍事拠点を掌握し，これらを高句麗侵攻のための軍事基地として活用したのである。史料には確認されないものの，遼西地域の他の軍事拠点も同じく隋・唐によって再活用されたはずで，防御体制及びこれらを拠点とする交通路も続けて利用されたと見ても差し支えはないだろう。実際，696 年に李尽忠の乱が起きて乞乞仲象と乞四比羽が営州を離れて高句麗故地に戻った経路も，通定鎮を経て玄菟城に至るいわゆる北道を利用したと推定される[66]。これは，当時の高句麗遺民たちは，高句麗滅亡以前から使用していた交通路を経由して遼東地域に帰ったということを示唆する。言葉を換えれば，6 世紀後半～7 世紀に高句麗人たちが使用していた遼東・遼西地域を連結する交通路は高句麗滅亡後も引き続き機能しており，遼東地域の剣牟岑勢力と遼西地域の高句麗遺民たちは，このような交通路を通じて接触しながら反唐抗争を計画したのではなかろうか。

次に，地域的な連帯感を考慮する必要がある。既に考察したように，645 年幽州に放免された高句麗人たちは，遼東地域から捕らわれて来た者たちであり，669 年に実施された徙民でも，営州地域に残っていた高句麗遺民たちの大多数は元を正せば遼東地域の出身であった。剣牟岑と遼西地域の高句麗遺民たちの間には，遼東地域出身という点で相互連帯意識が存在したのかもしれない。剣牟岑も高句麗遺民の間の親縁性に基づき，遼西地域の高句麗遺民との連携を推進し，6 世紀末～7 世紀に高句麗人たちが利用していた遼東―遼西地域を繋ぐ交

通路を通じて，反唐抗争のための具体的な計画を行っていたのではないか。これは，670 年初めに軍事活動として表出し，唐は二つの行軍を派遣して対応した。剣牟岑は早々に平壌一帯に南下したとはいえ，遼西・遼東地域での高句麗遺民の抵抗は 672 年まで続いた。「李秀神道碑（E-③）」と「郭行節墓誌銘（E-④）」から関連する内容を総合してみると，遼西地域の高句麗遺民たちは李謹行が率いる唐軍と 672 年まで対立し，陸路では遼東地域への補給を送らせないほど敵を悩ませた。新羅を討伐するために組織された鶏林道行軍を遼東地域に送らなければいけないほど 671 年には遼東地域で高句麗遺民たちが唐軍を圧迫しており，672 年に李秀が遼水を渡って戦った相手は，高句麗復興勢力以外には考えがたい。

これまでは，671 年 7 月に高侃が安市城を占領したことで[67]，遼東地域での復興運動が消滅したと認識されてきた。しかし，「李秀神道碑」から，672 年にも遼東地域に高句麗遺民の反唐抗争が持続していた可能性が確認できた。剣牟岑が南下したにも拘わらず，遼西と遼東地域で反唐抗争が持続し得た理由とは，剣牟岑が唯一の復興勢力ではなかったからではないか。『三国史記』地理志の未降城の存在から分かるように，遼東地域には様々な高句麗復興勢力が存在しており，剣牟岑はその中の一つであった。そのため，剣牟岑の南下以後も，遼東地域において持続的に唐軍と対抗する軍事活動が存在し，彼らと連携した遼西地域の高句麗遺民たちの反唐抗争も容易に唐軍によって鎮圧されなかったと推測される。

5．むすびに

今までの高句麗復興運動に関する研究は，朝鮮半島の北西部地域に限定されていたと言っても過言ではない。本稿では，遼東地域に発生した高句麗復興運動という観点から，剣牟岑の挙兵について考察した。本稿の結論として，以上の論点を要約する。

668 年 9 月，唐は高句麗を滅亡させて高句麗故地に安東都護府を設置したが，高句麗遺民たちは唐の支配政策に抵抗して挙兵した。『三国史記』地理志の鴨緑江以北の状況を記録した資料に現れる未降城の存在と，669 年 5 月に実施された徙民の経路から見て，遼東地域における唐軍への抵抗が相当激しかったことが推測される。

約 13 万人に及ぶ大規模徙民は，高句麗遺民の抵抗を触発したが，その代表的な存在が剣牟岑であった。彼は，高句麗滅亡の前から窮牟城の地方官として地方軍を率いていた。剣牟岑と窮牟城の住民は軍事指揮を手掛かりに結びつき，これが高句麗復興軍を組織できた基盤となった。唐が高侃と李謹行を行軍総管に任命し，剣牟岑勢力を鎮圧しようとした際の名目は，剣牟岑が唐の辺境に侵入したということであった。これは，剣牟岑が挙兵した地域が遼東地域であったことを強く示唆する。また，遼東地域で挙兵した剣牟岑勢力と遼西地域に徙

民された高句麗遺民たちが結合した可能性をも示す。彼らは，同じく遼東地域出身という縁に基づき，遼東と遼西地域を繋ぐ交通路を通じて反唐抗争を計画したのではないか。

高句麗遺民の軍事活動を鎮圧するために，高侃は遼東地域に，李謹行は遼西地域に派遣された。「李秀神道碑」と「郭行節墓誌銘」を見ると，672 年まで，遼東・遼西地域では高句麗遺民の反唐抗争が続けられていたようだ。遼東地域には様々な高句麗復興勢力が存在したため，剣牟岑が平壌一帯に南下しても遼東地域では反唐抗争が継続され，彼らと連携した遼西地域の高句麗遺民たちの軍事活動も 672 年まで続けられたのであろう。

注

［1］ 中国側の記録では，「剣牟岑」は「鉗牟岑」「劒牟岑」など，「安勝」は「安舜」として記録されている。史料を直接引用する部分を除き，『三国史記』の記録を尊重して「剣牟岑」・「安勝」に統一する。

［2］ 剣牟岑と安勝を中心とする高句麗復興運動に関する代表的な研究は，以下の通りである。池内宏「高句麗滅亡後の遺民の叛乱及び唐と新羅との関係」（『満鮮史研究』上世二冊，吉川弘文館，1960），李丙燾「高句麗의（の）一部遺民에 대한（に 対する）唐의（の）抽戸政策」（『韓国古代史研究』，博英社，1976），村上四男「新羅と小高句麗国」（『朝鮮学報』37・38，1966），梁炳龍「羅唐戦争 進行過程에 보이는（に 見られる）高句麗遺民의（の）対唐戦争」（『史叢』46，1997），林起煥「高句麗 遺民의（の）活動과（と）報徳国」（『高句麗政治史研究』，한나래（ハンナレ），2004），李相勲「剣牟岑의（の）最初 挙兵地 検討」（『韓国古代史研究의（の）資料와（と）解釈（盧泰敦教授定年記念論叢 2）』，四季節，2014），최재도（チョェ・ジェド）「漢城의（の）高句麗国再検討」（『東北亜歴史論叢』47，2015）。

［3］ 李相勲前掲論文，72-74 頁。

［4］ 高句麗の滅亡と，その後唐が高句麗戦役を締めくくる過程については，『資治通鑑』巻 201，唐紀 17，高宗総章元年 9・10・12 月条及び『唐会要』巻 14，献俘を参照。

［5］『旧唐書』巻 199，列伝 149，東夷，高麗，「遣左武衛将軍薛仁貴総兵鎮之。其後頗有逃散。」

［6］『三国史記』巻 6，新羅本紀 6，文武王 9 年正月，「唐僧法安来伝天子命求磁石。」

［7］ 李相勲『羅唐戦争研究』（주류성（ジュリュソン），2012），80 頁。

［8］ 李賢淑「7 世紀 新羅 統一戦争과（と）伝染病」（『歴史와（と）現実』47，2003），140-142 頁。

［9］ 李賢淑前掲論文，140 頁。

［10］『新唐書』巻 215，列伝 140，突厥，『資治通鑑』巻 201，唐紀 17，高宗咸亨元年 4 月。

［11］『三国史記』巻 6，新羅本紀 6，文武王 10 年 6 月。

［12］『三国史記』巻 37，雑志 6，地理 4。鴨緑江以北の状況を記録したこの資料は，667 年 2 月から 9 月にかけて唐軍が作成した遼東地域の戦況表と看做すのが一般的である（池内宏前掲書，335-336 頁，盧泰敦『高句麗史研究』，四季節，1999，223-225 頁）。しかし，当時の戦況と共に資料の編纂過程を見ると，高句麗滅亡以前の状況を反映したとは考えがたい（金康勲「679-681 年 宝蔵王의（の）高句麗 復興運動」『歴史教育論集』50，2013，311-316 頁）。

［13］ 盧泰敦前掲書，231-242 頁。

［14］『資治通鑑』巻 198，唐紀 14，太宗貞観 19 年 9 月，『資治通鑑』巻 202，唐紀 18，高宗咸亨 2 年 7 月。

［15］『旧唐書』巻 5，本紀 5，高宗下，総章 2 年 5 月。

［16］ 李成制「高句麗와（と）契丹의（の）関係―対隋・唐戦争期의（の）動向과（と）그（その）意味―」（『北方史論叢』5，2005），151頁。
［17］ 日野開三郎『小高句麗国の研究』（三一書房，1984），59-62頁。
［18］ 전준현（ジョン・ジュンヒョン）「670年에（に）再建된（された）'高句麗国'에 대한（に対する）研究」（『歴史科学』82-2，1982），37頁。
［19］ John C. Jamisonは，670年代に朝鮮半島で発生した一連の事件に関して，中国側の史書は不完全で不正確であることに比べ，『三国史記』の記録のほうがより詳細で正確であると評価した（존・씨・재미슨（John C. Jamison）「羅唐同盟의（の）瓦解―韓中記事取捨의（の）比較―」『歴史学報』44，1969）。
［20］ 李廷斌「高延武의（の）高句麗復興軍과（と）復興運動의（の）展開」（『歴史와（と）現実』72，2009），146頁。
［21］ 최재도（チョェ・ジェド）前掲論文，145頁。
［22］「答薛仁貴書」の史料的価値については，朴賢淑「「答薛仁貴書」，羅唐戦争期新羅外交의（の）表象」（『来日을 여는（を開く）歴史』10，2002）と金鎮漢「「答薛仁貴書」에 보이는（に見られる）新羅・唐密約記事의（の）史料的検討」（『人文論叢』71-1，2014）を参照。
［23］ 梁炳龍前掲論文，51頁，金寿泰「統一期新羅의（の）高句麗遺民支配」（『李基白先生古希紀念韓国史学論叢』上，一潮閣，1994），340頁，최재도（チョェ・ジェド）前掲論文，145-146頁。
［24］『玉海』は，南宋末期に編纂された宋代の代表的な類書の1つであり，王応麟が詔勅などのような公用の文書を作成するために，必要な制度典故を収集・整理して編纂したものである。以前の類書に比べて叙述が体系的であり，各項目の叙述から様々な文献を相互比較して考証したという特徴がある。よって，考証が学問の形式となったのは王応麟からであると評価されている（卓用国『中国史学史大要』（探求堂，1986），114-116頁，国史編纂委員会編「叢書類解題：『玉海』」（『韓国古代史料集成―中国篇―』1，学研文化社，2006）。
［25］ 中村裕一「王言の公布」（『隋唐王言の研究』，汲古書院，2003），202-220頁。
［26］ 営州から長安までに至る経路と里数は，金聖翰「唐後期各州에서（から）東都를 거쳐（を経て）京師로 가는（へ行く）交通路線」（『中国古中世史研究』21，2009），401-402頁を参照。
［27］『資治通鑑』巻202，唐紀18，高宗咸亨4年閏5月。
［28］ 李廷斌前掲論文，149-150頁。
［29］ 趙仁成「高句麗의（の）滅亡과（と）復興運動의（の）展開」（『高句麗의（の）政治와（と）社会』，東北亜歴史財団，2007）。
［30］ 鄭求福・盧重国・申東河・金泰植・権悳永注釈『（改正増補）訳注三国史記4』注釈篇（下）（韓国学中央研究院出版部，2012），267頁。
［31］ 林起煥「4-7世紀官等制의（の）展開와（と）運営」，前掲書，204-217頁。
［32］ 吉田光男「『翰苑』註所引『高麗記』について」（『朝鮮学報』85，1997）。
［33］ 황병선（ファン・ビョンソン）「高句麗武官職의（の）等級과（と）任務」（『歴史科学』1983-3，1983），44頁，盧泰敦前掲書，268頁，林起煥前掲書，243頁。
［34］ 盧泰敦前掲書，248頁，金賢淑『高句麗領域支配方式研究』（모시는 사람들（モシヌン サラムドゥル），2005），389-390頁。
［35］ 盧泰敦前掲書，476頁，박인호（パク・イノ）「温達을 통해 본（から見た）6世紀高句麗貴族社会」（『韓国古代史研究』36，2004），241-242頁。
［36］『三国史記』巻17，高句麗本紀5，烽上王2年8月。
［37］ 武田幸男「牟頭婁一族と高句麗王権」（『朝鮮学報』99・100，1981）。
［38］「忠州高句麗碑」，「太古鄒加共軍至于□□□于□古牟婁城守事下部大兄耶□。」

［39］「李他仁墓誌銘」,「君諱他仁本遼東柵州人也。… 祖福鄒本朝大兄，父孟真本朝大相。……于時授公柵州都督兼総兵馬管一十二州高麗統三十七部靺鞨。」

［40］ 尹龍九「中国出土의（の）韓国古代 遺民資料 몇 가지（の いくつか）」（『韓国古代史研究』32，2003），309 頁，안정준（アン・ジョンジュン）「「李他仁墓誌銘」에 나타난（に 表れる）李他仁의（の）生涯와（と）族原」（『木簡과（と）文字』11，2013），217 頁。

［41］ 林起煥「高句麗 集権体制 成立過程의（の）研究」（慶熙大学校博士学位論文，1995），151-154 頁。

［42］ 池内宏は，「残民」を唐軍と交戦した結果の敗残兵と解釈した（池内宏前掲書，429 頁）。

［43］『旧唐書』巻 199，列伝 149，東夷，百済，「百済僧道琛旧将福信率衆，拠周留城以叛」，『新唐書』巻 220，列伝 145，東夷，百済，「璋従子福信嘗将兵，乃与浮屠道琛拠周留城反」。

［44］『三国史記』巻 40，雑志 9，職官下。

［45］ 李文基「7 世紀 高句麗의（の）軍事編制와（と）運用」（『高句麗研究』27，2007），175-178 頁。

［46］ 北周末に行軍制度が戦時出征制度として確立される過程で，行軍名が出征戦区或いは作戦方向を指し始め，隋唐代に定例化された（孫継民『唐代行軍制度研究』，文津出版社，1995，6-7 頁）。

［47］ 李相勲前掲論文，67-72 頁。

［48］ 김종복（キム・ジョンボク）『渤海政治外交史』（일지사（イルジサ），2009），29 頁。

［49］『括地志』は，唐太宗の息子である魏王泰が主導して編纂された官撰地志で，641 年に完成した。上古から南北朝時代に至る地名や行政単位の名称の変化を考証して整理した本で，現在はその佚文が『史記正義』・『通典』・『太平御覧』・『太平寰宇記』・『玉海』等に引用されて伝わっている（李文基「泗沘時代 百済 前内部体制의（の）運営과（と）変化」『百済研究』42，2005，67-68 頁）。

［50］『史記』巻 4，周本紀 4，「封召公奭於燕。（括地志云，燕山在幽州漁陽県東南六十里）。」これは，『史記』周本紀に張守節が注釈を付けて『括地志』を引用した部分である。

［51］『高麗図経』巻 3，城邑，封境，「其国在京師之東北。自燕山道陸走渡遼，而東之其境，凡三千七百九十里。」

［52］ 李相勲前掲論文，70-71 頁。

［53］ 岑仲勉『金石論叢』（中華書局，2004），289-290 頁。

［54］『資治通鑑』巻 202，唐紀 18，高宗咸亨 4 年閏 5 月。

［55］ 周紹良・趙超主編「大周故郭府君墓誌銘」（『唐代墓誌彙編続集』，上海古籍出版社，2001）。

［56］ 権悳永「新羅 関連 唐 金石文의（の）基礎的 検討」（『韓国史研究』142，2008），56 頁。

［57］ 植田喜兵成智「唐人郭行節墓誌からみえる羅唐戦争― 671 年の新羅征討軍派遣問題を中心に―」（『東洋学報』96-2，2014），129-131 頁。

［58］ 植田喜兵成智前掲論文，136 頁，辛時代「唐代安東都護府研究」（東北師範大学校博士学位論文，2013），59 頁。一方，郭行節が風浪に遭い船が沈没して死亡したという表現は，死者を辱めないようにするための表現に過ぎず，実際は 671 年に新羅が唐の運搬船を襲撃した事件を指すとする説もある（権悳永『新羅의 바다（の 海）黄海』，一潮閣，2012，174-176 頁）。しかし，これは郭行節が溺死した場所が遼河である事実を看過したものである。

［59］ 宋基豪『渤海政治史研究』（一潮閣，1995），25-26 頁。

［60］ 鄭炳俊「‘営州城傍高麗人’王思礼」（『高句麗研究』19，2005）。

［61］『資治通鑑』巻 198，唐紀 14，太宗貞観 19 年 10・11 月。

［62］ 鄭炳俊「唐朝의（の）高句麗人 軍事集団」（『東北亜歴史論叢』24，2009），196 頁。

［63］ 池内宏前掲書，432 頁。これについての批判は，李相勲前掲論文，67-68 頁を参照。

［64］ 李廷斌「6 世紀 後半-7 世紀 初半 高句麗의（の）西方辺境地帯와（と）그（その）変化」（『歴史

와（と）現実』82，2011），李成制「高句麗의（の）西部国境線과（と）武厲邏」（『大丘史学』113，2013），鄭媛朱「7世紀高句麗의（の）西界変化」（『領土海洋研究』8，2014）。

［65］『資治通鑑』巻181，隋紀5，煬帝大業8年。

［66］宋基豪前掲書，64-65頁。

［67］『資治通鑑』巻202，唐紀18，高宗咸亨2年7月，「高侃破高麗余衆於安市城」。

（キム　カンフン　　亀尾荊谷中学校教師）
（ホン　ソンミン　　早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）